

養護教諭養成課程における野外教育活動の意義と役割

菊地 紀子

The outdoors education activity in Yogo-teacher course

Noriko KIKUCHI

Summary

The outdoors education activity in Yogo-teacher course started three years ago. I researched importance and the role of the outdoors education activity of the Yogo-teacher course. The students in Yogo-teacher course were conscious of the importance of cooperation and communications. Student's participation attitude to the outdoors education activity has changed. Student's participation attitude was negative at the start and positive at the end. Importance and the role of the outdoors education activity have been understood from student's report. I keep researching the outdoors education activity of the Yogo-teacher course.

要 旨

養護教諭養成課程で行われている野外教育活動は、試行錯誤の中で3年目を向かえた。年間指導計画の中に位置付けられる2泊3日の宿泊体験活動は、養護教諭を目指す学生にとって意義あるものであったのか、養護教諭としての自覚や視点を持つことができたのか、その役割を検討した。その結果、協力することやコミュニケーションの重要性を自覚した。そして、はじめは参加することに消極的だった者も、最終的には積極的に参加していた。養護教諭としての視点や今後の展望から、野外教育活動は、養護教諭を目指す学生にとって意義あるものであり、その役割を果たしていた。今後も効果的な教育活動として、さらなる研究が必要である。

1. はじめに

小学校、中学校、高等学校においては、年間教育計画の中に遠足や臨海学校、林間学校、修学旅行等、野外教育宿泊体験活動などが位置づけられ、実施されている。養護教諭は、これらの野外教育宿泊体験活動に参加しながら、児童・生徒の健康管理及び救急看護についての実践的活動を行う。

本学の養護教諭養成コースの学生は、1年次夏休みに行われる小学校1日体験に始まり、春休みの看護学実習や病院での臨床実習、野外教育活動等、小学校、中学校、高等学校の養護教諭の教育実習（以下「養護実習」という）に向けて体験的に学ぶプログラムを行ってきた。これらの体験プログラムは、学生にとって初発の体験として難しい活動であり、戸惑うことが多かったに違いない。

そこで、本学では、充実した実践活動によって、養

護教諭として必要な実践的指導力形成を目指した教育及び研究を進めてきた。¹⁾ ²⁾ ³⁾ さらに、養護教諭としての実践的指導力形成に不可欠であるという内外からの要望に応えるために、「野外における実践的教育活動」を試行した初年度に、日本教師教育学会で発表し、有益なご助言を頂いた。それから3年、試行錯誤の中で実施してきた野外教育活動について報告する。学生は、野外教育活動において、限られた時間、空間の中で、集団生活及び健康保全活動の体験によって、どのような問題意識を醸成し、合わせて養護教諭としての自覚や視点を持つことができたか、その変容過程を検討することを意図して、本研究を進めた。

2. 研究の目的

- (1) 野外教育活動の実践的活動によって、どのような意識の変容が見られるかを明らかにする。
- (2) 野外教育活動を通して、養護教諭としての自覚や

視点を持つことができたかを明らかにする。

3. 研究方法

- (1) 野外教育活動の実践指導過程において、養護教諭を目指す学生の意識が、どのように変容するか、実施後に提出されたレポートをもとに分析する。
- (2) 養護教諭を目指す学生は、野外教育活動において、養護教諭としての役割をどのように自覚し、その重要性を理解できたか、実施後に提出されたレポートをもとに考察する。

4. 年間指導計画の中における野外教育活動の位置づけ

養護教諭の実践的指導力形成を目指して行われる体験プログラムは、年間を通して行い、その中に野外教育活動も位置づけている。

表1に年間指導計画予定表を示した。

表1 養護実習指導及び看護学V・VI 年間指導計画予定表

実施日	1 年 次	実施日	1 年 次
4月 新入生オリエンテーション 初日	養護教諭とは 心構え、身だしなみ、態度、言葉遣い 教員採用試験対策について	12月	野外教育活動事前指導 看護学V・VI(臨床実習)事前指導
4月 オリエンテーション中 履修届提出	個別面談 資格取得意志確認 (自己評価による)	1月	看護学V・VI(臨床実習)直前指導
5月	「教育実習の意義」 (1) 学校保健と養護教諭の役割 (2) 教育実習の意義	1月最終週	看護学V(看護学院実習)
6月	1「教育実習の在り方」 (1) 教育実習の基本事項 ①健康教育 ②学級活動としての保健活動 ③日誌の付け方 ④訪問指導において気づいたこと	2月	野外教育活動直前指導 野外教育活動 看護学VI(病院実習)
7月	(2) 実践的指導法 ①保健指導計画 ②学習指導案作り ③効果的な教材作り ④指導法の工夫 教育参加について	3月	看護学V・VI(臨床実習)事後指導
8月 1週間	ハートセーバーAED実習	実施日	2 年 次
9月1週目～ 2週目	(3) 教育参加(グループワーク) ①保健室の経営 ②児童・生徒への対応 ③教育相談 ④保健関係事務 *1実習校 渋谷区内小学校	4月 オリエンテーション中	(4) 教育実習直前指導その1 ①(3)の教育参加を踏まえて実習に臨む ②切実な課題・目的を持つ ③教育実習への心構えを持つ
10月	教育参加事後指導 情報交換及び教育課題発表会	4月～	(5) 教育実習直前指導その2 実習時期に合わせ、担任が個別面接指導を行う
		4月～	2 教育実習 その間担任が訪問指導を行う
		7月	3 教育実習事後指導及び反省会 (1) 教育実習の振り返り (2) 体験的情報交換

(注) 本プログラムは、本学の諸行事等によって日程が変更する場合がある。

年間指導計画としては、4月入学当初の養護教諭になるための動機づけに始まり、個別面談、翌年には教育実習に行くことになる心構えや、養護教諭の役割等を実施していく。その中に体験的な活動として、小学校教育参加、野外教育活動がある。

野外教育活動の事前指導では、資料1に示す保護者同意書を配付し、資料2に示す内容を実施する。冬休み前に事前指導を行うのは、帰省する学生に保護者同意書を持参させる配慮からである。

初年度は夏休みに2年次生を対象として実施されたが、ほとんどの学生は養護実習を終えている時期でもあり、目的意識の希薄さが感じられた。また、同じクラスの中にあっても話したことがない、知らないといった学生間のコミュニケーションのなさがあった。これからの教員のあり方として、集団の中でコミュニケーションをうまくとれる能力も必要である。そこで、次年度は、1年次生に対し、夏休みに実施することと

資料1 保護者同意書

平成18年12月15日

保護者各位

帝京短期大学
学長 沖水 寛子

野外教育における養護実践活動

拝啓 寒冷の候、時下ますますご清祥の段、お慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、この度養護実習指導の一環として、野外教育における養護実践活動を行うにあたり、別紙の通り実施いたします。

宿泊を伴う行事では、全員が健康で安全に過ごし、無事帰宅できることが、一番大切なことです。

つきましては、保護者の皆さまにもご理解、ご協力をお願いいたします。

敬 具

記

実施日時 平成19年2月21日(水)～23日(金)2泊3日
 実施場所 千葉県立大房岬少年自然の家 〒0470-33-4561 (内房線 富浦下車)
 住所 〒299-2404 千葉県安房郡富浦町多田良 1212-23
 現地集合、現地解散

以上

.....き.....り.....ト.....リ.....線.....

学籍番号 番
 学生氏名 印
 保護者氏名 印

私は、「野外教育における養護実践活動」参加にあたり、下記の通り申告し、保護者同意の上参加いたします。

申告を要するもの	内 容
持病	有・無
蜂アレルギー	有・無
食物アレルギー	有・無
その他	有・無
緊急時の連絡先	TEL

提出期限 1月19日(金) 養護演習授業時各担任へ

資料2 事前指導内容

18.12.15

野外教育における養護実践活動事前指導

1. **目 的**
 小・中学校においては、遠足、修学旅行、臨海学校、林間学校等、野外=校外学習がある。野外=校外学習の場合は、養護教諭として引率参加し、児童・生徒の健康管理及び予期できない事故(けが、病気など)に緊急処置を施すことがある。そのため体系的・実践的に学ぶことを目的として、実践的活動を行うものである。

2. **実施方法**
 (1) 日時 平成19年2月21日(水)～23日(金)2泊3日
 (2) 場所 千葉県立大房岬少年自然の家 〒0470-33-4561 (内房線 富浦駅現地集合)
 (3) 対象 1年養護教諭資格取得希望者
 (4) 具体的実践活動
 ①集団生活での協力的活動と健康管理方法
 ②決められた日程に即して規律ある生活を行う
 ③予期されないけが、病気などに対する緊急処置法
 ④生活環境の保全活動(ごみ処理、掃除、食べ残し処理)
 ⑤先輩の話を聞き、自己啓発の向上を図る
 ⑥2泊3日の生活で「学んだこと」の発表=情報交換を行う

(5) 必要経費
 交通費：各自実費
 その他費用：集金済みの実習費で賄う予定

3. **引率教員** 穴戸、羽豆、上原、伊藤、菊地

4. **事前指導**
 第1回 12月15日(金) 養護演習 目的、主な活動、注意事項等を行う
 第2回 2月8日(木) 詳細について行う

5. **主な予定**

	午前	午後	夜
2/21(水)	12:40 富浦駅前集合 12:45 バス出発	13:00 部屋割り、安全確認 14:00 入所式 大房岬少年自然の家 での事故報告視聴	17:00 代表打ち合わせ 17:30 夕食 19:00 レジャーソング 20:00 入浴 22:00 消灯
2/22(木)	6:30 起床・洗面 7:00 健康観察 7:30 清掃 8:00 朝食 9:30 野外実践活動 昼食(セルフ作り (出たがモンパシオンホーム)	13:30 ハイキング 15:00 プレリナーム	17:00 代表打ち合わせ 17:30 夕食 19:00 レジャーソング 20:00 入浴 22:00 消灯
2/23(金)	6:30 起床・洗面 7:00 健康観察 7:30 清掃 8:00 朝食 9:00 退所点検 9:30 班別課題研究発表 (村モンパシオンホーム) 11:30 退所式 11:45 昼食 12:45 バス出発 13:15 富浦駅前解散		

6. **持参するもの**(全てに記名のこと)
 しおり、健康カード、記録手帳、懐中電灯、室内用上履き、保険証のコピー、常備薬品他(虫除けスプレー、虫刺されの薬、体温計、生理用品等)雨天用具、軍手、長袖パジャマ、着替え、タオル、洗面用具、シャンプー、リンス、石鹸等全てないものと思っておくこと
7. **持参してはいけないもの**
 ドライヤー(電気の容量が足りないため、ブレイカーが落ちて、暗闇になるため)
8. **服装**
 長袖、長ズボン、帽子、運動靴(滑らないもの)、両手が空くカバン(緑=黒色に向かってくる、蚊など虫対策) (岬の外れ丘陵地帯)
9. **班活動及び事後指導**
 班別課題研究テーマ及び個人研究テーマを設定しておくこと。
 設定理由を明確にし、事前に調査、研究、情報収集を行うこと。
 事前研究と現地調査を踏まえて発表できるようにすること。
 3月 事後指導：反省会及び野外活動の成果発表各担任へレポート提出
10. **注意事項**
 宿泊を伴う行事では、全員が健康で安全に過ごし、無事帰宅できることが、一番大切なことです。よって、単独行動は絶対に行わないこと。また、班活動中、方が一事故、急病があった場合でも、携帯電話で救急車を呼ばないこと。携帯電話は、富津の消防本部に連絡が入るため、救急車到着まで1時間以上掛かる。緊急時は大房岬少年自然の家の所員の方に連絡すること。
 スズメバチなど班活動時は十分に注意すること。また、ヤブ蚊、アブ、まむし、ムカデ、きこの等危険なものに近寄らないこと。
 外は街灯もなく、夜は真っ暗闇になるため、夜間外出禁止。
 駐車場がないので、車、バイク等での現地集合禁止。
11. **お 別** 月によってダイヤが変わることもあるので、各自で調べること。
- 行き
- 東京駅 9:30 発 富浦駅 11:14 着 特急ビューさざなみ5号
 東京駅 10:30 発 富浦駅 12:30 着 特急さざなみ7号
 帰り
 富浦駅 13:24 発 東京駅 16:04 着 特急ビューさざなみ14号
 富浦駅 14:12 発 東京駅 16:04 着 特急さざなみ16号

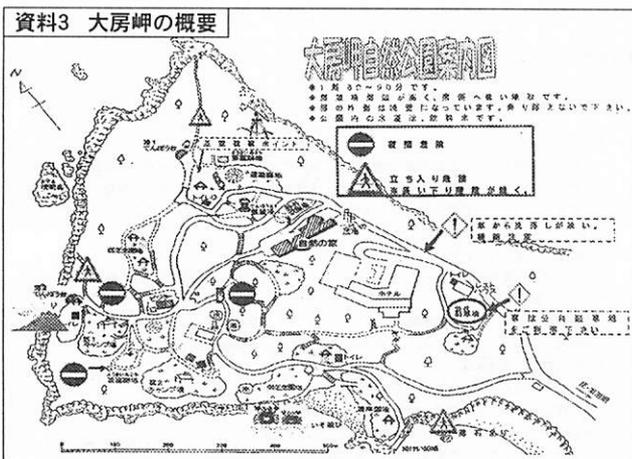
なった。24時間寝食を共にし、同じ目的を持ってこれから学んでいこうとする時期に実施することは、後は卒業に向けて必要単位を取得するだけとなった2年次の夏休みに実施するよりも、学生間だけでなく、教員に対しても親近感を覚え、その後の学生指導にも有益であった。しかし、宿舎を他の団体と共同利用することの困難さや他のプログラムの実施計画などがあり、3年目からは1年次春休みに実施することが最善という結論となった。

5. 野外教育活動実施場所及びプログラム

(1) 野外教育活動実施場所

野外教育活動を実施した場所は、千葉県大房岬少年自然の家である。実施した1年目2年目は、県立の青少年教育施設であった。3年目からは、民間の運営となり、全国から野外教育の専門家が集められたとのことであった。

大房岬少年自然の家がある大房岬の概要を、資料3に示した。



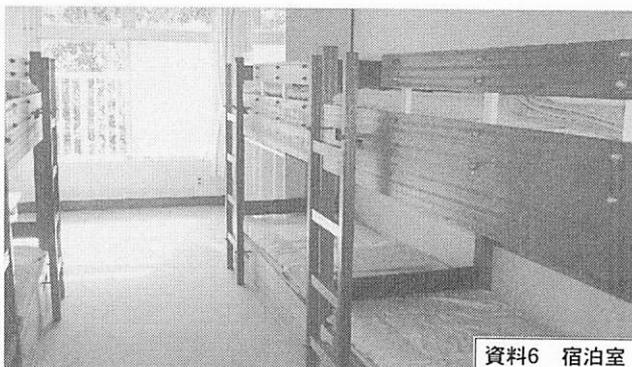
大房岬は、丘陵地帯で、国定公園の中にあり、旧日本軍の要塞跡地等がある。ハイキングやオリエンタリングには最適な環境である。

大房岬少年自然の家の施設を、資料4、資料5、資料6に示した。

資料4 プラネタリウム



資料5 ラウンジ



資料6 宿泊室

施設としては、プラネタリウムがあり、ロビーにはTVもあるが、学生は利用していなかった。部屋は造り付けの2段ベッドがあり、12人が定員であるが、小・中学生向けの施設ということもあり、大人が12人入ると狭いため、1部屋4～5人という部屋割りであった。

(2) 活動の単位

活動の単位は、各グループ4～5名という単位で行い、部屋割りもそれにしたがって決められた。

(3) 野外教育活動実施プログラム

表2に野外教育活動実施プログラムを示した。

表2 野外教育活動実施プログラム (3年目)

	午前	午後	夜
2/21(水)	12:40 富浦駅前集合 12:45 バス出発	13:00 部屋割り、安全確認 14:00 入所式 安全対策講義	17:00 代表打ち合わせ 17:30 夕食 19:00 班別研究活動 20:00 入浴 22:00 消灯
2/22(木)	6:30 起床・洗面 7:00 健康観察 7:30 清掃 8:00 朝食 9:30 野外実践活動 昼食カレーライス作り (雨天:オリエンテーションルーム)	13:30 ハイキング 15:00 プラネタリウム	17:00 代表打ち合わせ 17:30 夕食 19:00 レクリエーション 20:00 入浴 22:00 消灯
2/23(金)	6:30 起床・洗面 7:00 健康観察 7:30 清掃 8:00 朝食 9:00 退所点検 9:30 班別課題研究発表 11:30 退所式 11:45 昼食 12:45 バス出発 13:15 富浦駅前解散		

1年目：養護教諭のお話
2年目：大房岬少年自然の家での事故報告視聴

野外教育活動の実施プログラムは、初年度は現地の養護教諭の先生方からお話を伺うという計画が初日に

用意されていた。しかし、実施時期によって変動のある内容を用意することは、困難な面もあり次年度からは、宿舎である千葉県大房岬少年自然の家のスタッフからの、事故報告視聴となった。これも実際に体験したスタッフでなければ臨場感に欠けるところがあり、スタッフの移動等を考えると困難な面があった。最終的には野外活動中の絵を見せ、想定される危険をグループ毎に考えさせる活動（以下「安全対策講義」という）に落ち着いた。初日に行われるこの活動を動機づけとし、その後に行われる実際の体験活動、研究発表というプログラムで、養護教諭を目指す学生に対し、野外教育活動を実施した。

①安全対策講義

資料7 野外活動中の絵 みんなで考えよう



どこがあぶないのかな？

(状況)

たのしそうにハイキングをしています。

社団法人 全国子ども会連合会『みつけたキケン君』1995

資料7に、安全対策講義で使用する野外活動中の絵を示した。この活動は、具体的な野外活動中の絵であることと、グループで考えさせるという二つの相乗効果により、野外教育活動に対して消極的な学生も、具体的なイメージがわき、積極的に参加するというよい効果をもたらした。

②野外実践活動

野外実践活動としては、野外でのカレーライス作りを行った。カレーライス作りは、施設の関係からグループ合同の12～13名で、薪割り係、飯盒炊爨係、カレー係に分かれ活動した。その時の様子を資料8に示した。薪割りや飯盒炊爨は初めてという学生もあり、少

資料8 野外実践活動

カレーライス作りの風景



年自然の家のスタッフの指導のもとに行った。

③ハイキング

資料3の地図の中に、チェックポイントを設け、そこを通過しながら、大房岬の中をグループごとにハイキングした。その際、養護教諭として、子どもたちを引率してきたことを想定して、考えられる危険、気をつけるべきこと等を考えさせる活動である。

④プラネタリウム

少年自然の家がある大房岬は、国定公園ということもあり、街路灯がない。したがって、夜間に外出すると真っ暗闇である。そのため、天候に左右されないプラネタリウムで、星の観察を行った。

⑤レクリエーション

体育館を使い、道具を使わなくてもできるレクリエーションについて、少年自然の家のスタッフの指導のもとに行った。

⑥班別課題研究発表

表3 班別課題研究発表テーマ一覧表

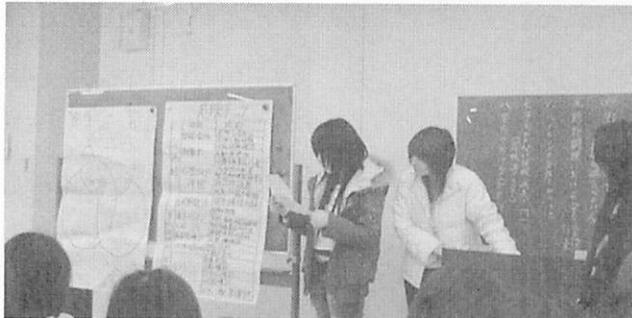
班	研究テーマ
1	野外教育における病気やけがの予防と対応
2	宿泊学習における健康管理
3	熱中症の予防と応急処置
4	野外での病気やけがの対応
5	アレルギーについて
6	野外活動によって起こる病気やけがの対応
7	刺された噛まれた野外での注意ポイント
8	食中毒について
9	ハイキングでのけがの予防
10	男性養護教諭としての価値

班別課題研究発表テーマを表3に、その様子を資料9に示した。

課題研究は、各グループごとに夏休み明けからテー

マを決め、話し合い、事前に調査研究を行った。そして、実際に現地で活動する中で、まとめ上げるというものである。発表準備のため、徹夜で準備を進めるグループもあった。

資料9 班別課題研究発表



6. 結果及び考察

2泊3日の野外教育活動を通して、様々な意識の容や養護教諭としての自覚や視点を持たせたことが、実施後に提出されたレポートから読み取ることができた。

表4にレポートを分析した主な記述と割合を示した。

(1) 安全対策講義との関連

初日に行われる安全対策講義は、翌日に行われる野外での薪割り、飯盒炊爨、カレーライス作りやハイキングにおいて、効果的に作用し、各プログラムに対し、安全対策講義と関連づけた考察をした者は、6割に及んだ。「話を聞くだけでなく参加することで頭に入った」や「事前に学んでいたことが活かせず、危険なことを身をもって実感した」等の具体的な安全対策講義と各プログラム名が出てこないまでも、全ての学生が、野外教育活動中における安全対策について、考察していた。このことにより、初日の安全対策講義は、野外教育活動を始める前の動機づけとしては、効果的であると考えられた。

(2) 共同作業・コミュニケーション

表5に役割分担表を示した。班長、生活係、食事係は、少年自然の家を利用するに当たって、指定された役割分担である。それ以外の役割については、班員の人数により適宜兼務することとなる。

「班長だし、これが子ども達を連れた林間学校だったらと思って嫌いなものも食べた」や「食事係をやり、

表4 野外教育活動レポート分析表

カテゴリー	主な記述	39人中 頻度数 (人)
安全対策講義との関連	<ul style="list-style-type: none"> ハイキングでは前日の講義を踏まえて、危険箇所を確認することが出来た。 危険な場所も子どもの目線になって発見できた。 話を聞くだけでなく参加することで頭に入った。 薪割りは初体験で楽しかったが、いざやるとなるといろいろ気をつけながらやっていると怖くしょうがなかった。子どもがやった時に、注意しなければいけないことを学んだ。 禁止事項しか思い浮かばなかったが、縛りすぎず自己責任と指導者の許容範囲の中でやっていくというお話し、子どもに窮屈な思いをさせることがわかり、同時に先生ってすごいことをしているんだと思った。 ハイキングではふざけたり、一人一人のペースの違いからはぐれかけたりと、事前に学んでいたことが活かせず、危険なことを身をもって実感した。 	62% (24)
共同作業・コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> カレーライス作りでは皆で分担して作業が出来た。 レクリエーションではいつもあまり関わることのない人と相撲したり、先生のいつも見られない表情・行動に驚いた。 班長だし、これが子ども達を連れた林間学校だったらと思って嫌いなものも食べた。 いつも一人でご飯を食べているので、皆で食べるの美味しいと改めて思った。 普段接することのない他のクラスの人から得るものがたくさんあって充実した3日間だった。 たくさんの人と話すことで自分の励みになったし、同じものを目指す仲間意識が芽生えた。 食事係をやり、衛生上気をつけなければいけないことや食物アレルギーについて実感した。 この3日間を通して団体行動が苦手でも、自分に合わない人がいても、お互いに歩み寄り協力することが大切だと思った。 TVやゲーム機のない場だからこそ、レクリエーションを通してコミュニケーションが図られやすくなり、他者を見つけ、自分を見つめる良い機会となった。 カレー作りは思ったより時間が掛かり、野外活動では余裕を持った時間設定が必要だと感じた。 相手と手を合わせて叩くレクリエーションでは、相手に合わせることでうまくいき、ただの遊びでも目的を持って行くと、良い効果や結果を生み出すことを学んだ。 ケータイは面白だし、早く帰りたいと思っていたが、役割分担を決め、協力して行うことで、いままでもより仲良くなれ、知らなかった部分も発見することが出来た。 しおひ作成係だったが、先生方はどんな思いで作成していたかわかった。 	64% (25)
意識の容	<ul style="list-style-type: none"> 行くまではとても臆だったが、友達との仲も深まったし、責任感も出てきたし、いいこともたくさんあったから行ってよかった。 仲間と夜食を共に活動する中で、一体感が生まれたことはとても嬉しかった。 休み中ということもあり不規則な生活から、規則正しい生活を見てみると、やっぱり身体も元気だし、外に出るのも気持ちよく感じた。 カレー作りも積極的に自分から進んで出来たし、ハイキングも前日の講義内容に注意しつつ、がんばって歩けた。 皆で協力する中で絆を深め、責任感が生まれ、チームワークの大切さを学び、自分が成長できた気がする。 レクリエーションも初めはやりたくないと思っていたが、やってみるとおもしろく、野外教育活動にも参加したくなかったし、早く帰りたいと考えていたが、意外にも実習期間が短く感じ、楽しんでいる自分がいた。 ハイキングは、普段歩く習慣がない私にとって良い運動になり、普段何気なくしている食事もとても大事だと強く感じることができた。 大人と子どもの視点から見ると全然違っていていることを、自分自身が体験してわかることが多いと思った。 	26% (10)
養護教諭としての視点	<ul style="list-style-type: none"> 3度の食事の様子から食物アレルギーのある子どもへの対応や、食べた量から体調を観察することが大切だと思った。 プラナリウムではこの晴い中で病人が出たらどう対応したらいいか考えた。 養護教諭だからこそ注意しなければならぬことが分かって良かった。 野外実習先に保健室がないことを念頭に置いて、あらゆるけがや病気を予測して準備し、事前に保健指導をすることも大切だと思った。 ハイキングは事前の下見のような感覚で行った。 ハイキングでは歩くだけで危険箇所が見つかり、子どもを引率してる時には、トイレの場所も把握していなければならぬと思った。 レクリエーションのようにコミュニケーションを図ることから、子どもの心の成長を促さなければいけないと思った。 養護教諭自身も体力をつけていかなければならぬと実感した。 ハイキングでは、子どもから目を離さず、心に余裕を持って見ることが大事だと思った。 カレー作りは室内で作るときより何倍も、衛生管理や安全管理をしなければならぬと思った。 入浴時の想定されるケガ等(石で滑る、浴槽で溺れる)にも配慮しなければならぬと思った。 シーツを敷く時の埃は喘息の子にはよくないと思うので、違う仕事をやりやらせる等の対応が必要だと思った。また、窓を開けてやることも大切だと思った。 前庭の時に歩き回ってする人もいたので、子どもにはケガをしないよう指導することも大切だと思った。 翌日に備えて早く寝させることも大切だと思った。 健康カードを毎日きちんと見ることや、夜部屋を見回することも重要だと感じた。 	36% (14)
今後の展望	<ul style="list-style-type: none"> 子ども達を連れて歩いたら、もう少し注意しながら歩いて、楽しかったかなと思った。 一人でハイキングに行った時などに、知識や経験を増やしていけたらいいと思う。 養護教諭になるという意識で見ると危険箇所や注意しなければいけない行動などが見え、どれだけ安全に無事ケガのないように子ども達を過ごさせるか、その中で楽しんでもらえるか等、考えさせられる野外教育活動だった。 私自身の野外における活動力を向上させなければならぬと感じた。 この3日間を得たことをこれから活かしたい。 これまでの野外学習の裏には教員の努力があったのだと気づき、引率される側でいられるのも今回が最後で、次からは子どもを引率する側になるのだと思うと、今後の学習も残り1年真剣に取り組まなくてはならぬと思った。 野外教育活動にも様々な状況が考えられ、今回の野外教育活動で新たな課題として捉えることが出来た。年に数回しかないからと油断してはならぬと思った。 研究発表では皆で協力して出来たが、来年の教育実習では一人でやらなければならないと思うと、ちょっと不安に感じた。 食事係を預けたり、食べるのが遅いことがわかったので、教育実習に行く時まで直そうと思った。 間食もしないで、早寝早起きをした3日間のお陰で、自分の生活習慣を見直すことが出来、これからは規則正しい生活を送ろうと思った。 	38% (15)

衛生上気をつけなければいけないことや食物アレルギーについて実感した」、「しおり作成係だったが、先生方はどんな思いで作成していたかわかった」等、役割について自覚と責任を感じる記述がなされていた。

また、「この3日間を通して団体行動が苦手でも、自分に合わない人がいても、お互いに歩み寄り協力することが大切だと思った」や「TVやゲーム機のない場だからこそ、レクリエーションを通してコミュニケーションが図られやすくなり、他者を見つめ、自分を見つめる良い機会となった」、「ケータイは圏外だし、早く帰りたいと思っていたが、役割分担を決め、協力して行うことで、いままでより仲良くなれ、知らなかった部分も発見することが出来た」等、集団生活については、6割強の学生が、寝食を共にし、役割分担を決め、共同生活、共同作業をする中で、集団で生活することの難しさや、決められたルールやスケジュール、役割をこなさなければ、一時も生活できないことを自覚していったことが記述されていた。そして、だんだんに責任感や協調性が大事であることに気づき、コミュニケーションを取る必要性を自覚していったことが記述されていた。これは、コミュニケーションは携帯電話という学生にとって、電波の届かない環境であったことが功を奏したと考えられた。実際に携帯電話が使えないから、普段よりよく話したという記述もみられた。

表5 役割分担表
部屋番号 班

役割名	概要	氏名
班長兼部屋長	班の代表者 代表者会議出席	
生活係	リネン受取・返却	
食事係	配膳、後片づけ	
清掃係	分担場所・用具の 確認	
健康係	班員の健康カード 回収・報告	
入浴係	入浴順番の確認、 連絡	
しおり作成係	しおりの作成	

* 各々の役割は、責任を持って果たすこと。各係は、班の代表者ということなので、班員は各係代表者の指示に従い協力すること。
* 研究は、班長を中心に行うこと。しおり作成係以外は現地での係分担任。

(3) 意識の変容

「行くまではとても嫌だったが、友達との仲も深ま

ったし、責任感も出てきたし、いいこともたくさんあったから行ってよかった」や「レクリエーションも初めはやりたくないと思っていたが、やってみるとおもしろく、野外教育活動にも参加したくなかったし、早く帰りたいと考えていたが、意外にも実習期間は短く感じ、楽しんでいる自分がいた」等、意識の変容過程としては、3割弱の学生は、初めはいやだった、参加したくなかったという気持ちに変化していき、最後には良い体験ができたという記述となっていた。これは、日常の生活から非日常である集団生活に対する抵抗感が、実際に生活し体験することによって、変容していることが考えられた。

(4) 養護教諭としての視点

「三度の食事の様子から食物アレルギーのある子どもへの対応や、食べた量から体調を観察することが大切だと思う」や「入浴時の想定されるケガ等(石鹸で滑る、浴槽で溺れる)にも配慮しなければと思った」、「シーツを敷く時の埃は喘息の子にはよくないと思うので、違う仕事を作りやらせる等の対処が必要だと思った。また、窓を開けてやることも大切だと思った」等、食事や入浴、寝具の用意など、宿泊体験学習でなければ、気づかないことにも気づき、考察する記述がみられた。また、「野外実習先に保健室がないことを念頭に置いて、あらゆるけがや病気を予測して準備し、事前に保健指導をすることも大切だと思った」や「レクリエーションのようにコミュニケーションを図ることから、子どもの心の成長を促せるきっかけを与えていきたいと思った」等、現地での注意はもちろん、事前指導の大切さや、身体だけではなく、心の面にも配慮する記述がみられた。このように、養護教諭としての視点を持った考察をした者は、4割弱であった。学生としての立場と養護教諭になったとしての立場と、両方の視点から考察するには、養護実習などで実際に学校現場を体験していない1年生には、難しいということが考えられた。

(5) 今後の展望

しかし、「これまでの野外学習の裏には教員の努力があったのだと気づき、引率される側でいられるのも今回が最後で、次からは子どもを引率する側になるのだと思うと、今後の学習も残り1年真剣に取り組まなくてはと思った」や「食事を残したり、食べるのが遅いことがわかったので、教育実習に行く時までに直そうと思った」等、今後はという将来に向けての記述をした者が、4割弱であったことから、次年度の養護実習に向けて、さらには将来養護教諭になった時という、養護教諭としての自覚が芽生えたことが考えられた。

7. おわりに

文部科学省の野外教育に関する調査研究⁴⁾において、青少年の体験不足を補う様々な野外教育を今後、さらに、振興することが必要とされ、教員や教員養成課程の大学生に対して、野外教育の活動体験や指導体験などの体験的活動の推進が望まれる、とある。普段接することの少なくなった自然を子どもたちに体験させるためには、教員自身が体験したことがなければ、危険を予測することなどできないのではないかと考える。学校教育において、野外教育活動が必要不可欠であり、そこでの養護教諭の役割の大きさを考えると、養護教諭養成課程において、野外教育活動を実施することは意義深いものがあると考えられる。これまで、幼児教育の分野^{5) 6) 7) 8) 9)}では、研究が進められてきているが、養護教諭養成課程¹⁰⁾においても今後さらに研究が必要であり、今後も引き続き研究を進めていきたいと考える。

終わりに、4月入学当初から1年間養護実習指導はもとより、折りに触れて養護教諭になるということについて、教育指導を行ってきた本学学生の成長した姿を本稿により垣間見ることができ、改めて本学学生に感謝し、これも養護教諭養成課程の教員による学生指導があつたことと、本文寄稿にあたりご協力いただきました宍戸洲美、羽豆成二、上原真理子、伊藤能之以上4名の先生方に深謝申し上げます。また、本学の野外教育活動に協力して下さり、資料を提供して下さいました大房岬少年自然の家のスタッフの方々に深謝申し上げます。

本報告は、日本教師教育学会第17回大会において、口頭発表したものに加筆、修正したものである。

<参考文献>

- 1) 菊地紀子、佐島群巳 養護教諭養成における実践的指導力形成に関する研究－「実践事例」「視聴教材」の活用を中心に－ 日本教材学会研究年報第14巻 pp.217-222 (2003)
- 2) 菊地紀子、佐島群巳 養護教諭養成における実践的指導力形成に関する研究(第二報)－教育参加の意味づけ－ 日本教材学会研究年報第15巻 pp.217-220 (2004)
- 3) 菊地紀子、佐島群巳 養護教諭養成における実践的指導力形成に関する研究 帝京短期大学紀要、No13、pp.105-132 (2004)

- 4) 青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議 青少年の野外教育の充実について(報告) 文部科学省 (1996)
- 5) 加藤渡、堀義幸 保育者をめざす学生への野外教育 一宮女子短期大学紀要、第44集、pp.59-66(2005)
- 6) 西島大祐 幼児教育者養成プログラムとしての組織キャンプの可能性 鎌倉女子大学紀要(14) pp.97-102 (2007)
- 7) 渋谷寿、小口志磨 野外教育における造形活動(第7報):キャンプクラフト指導マニュアルの試案に向けて 名古屋女子大学紀要、人文・社会編 41 pp.103-114 (1995)
- 8) 渋谷寿、沖幸子 野外教育における造形活動(第6報):キャンプカウンセラーの視点から 名古屋女子大学紀要、人文・社会編 40 pp.97-106 (1994)
- 9) 渋谷寿、沖幸子 野外教育における造形活動(第5報):幼児教育と野外教育との関係の視点から 名古屋女子大学紀要、人文・社会編 39 pp.113-125 (1993)
- 10) 佐島群巳、菊地紀子、原田涼子、上原真理子 野外教育活動における健康管理の実践的研究－野外活動と養護教諭の役割をめぐって－日本教材学会研究年報第16巻 pp.215-220(2005)